

## 障害者の個別ニーズに対応した衣料の課題の実態と国リハの取組の効果 ～国リハコレクションの9年間の取組における質問紙調査から～

研究所 障害福祉研究部 清野絵・小野栄一

【1. 背景と目的】 近年、障害者の衣料については、機能性に加え好み等の審美性についての行われるようになってきた (Hallら, 2017・Kim,2018)。そのような中、当センターでは、「国リハコレクション」の名称で、2011年から現在まで、研究所、病院、自立支援局が連携し、障害者の機能性と審美性の個別のニーズに対応した衣料の開発と、衣料の課題の社会への啓発や情報提供を目的とした、ファッションショー、展示会を行ってきた。以上から、本研究では、障害者の社会参加の促進に寄与することを目的として、障害者の個別ニーズに対応した衣料の課題の実態と国リハコレクションの取組の効果を明らかにする。

【2. 方法】 2011、2012、2018年、2019年の国リハコレクションで、参加者に実施した質問紙調査のうち、共通の質問項目があるものについて、統計分析を行う (有意水準5%)。なお、実態については全年度を合算したもの、経年変化については2011年と2019年を対象とする。

【3. 結果】 1) 基礎統計：回答者数305名 (男性112名、女性181名、不明12名)、年齢は10代～80代 (図1)、属性は元・現入院患者・利用者41名 (13.4%)、センター職員66名 (21.6%)、外部198名 (64.9%)であった。障害の有無は障害あり89名 (29.2%)、障害なし203名 (66.6%)、不明13名 (4.3%)、障害ありの障害種別は、脊髄損傷31名 (34.8% (障害あり内、以下同じ))、脳血管障害11名 (12.4%) 等であった。分析対象の回答者数は質問項目により異なる。

2) 衣料の課題の実態：「衣料で困っていることの有無」「着たい衣料の入手の可否」の2項目について分析を行った。 $\chi^2$ 検定の結果、両項目に障害の有無による有意差はなかった。次に、2項検定の結果、両項目に障害者の回答内での有意差はなかった。次に、 $\chi^2$ 検定の結果、両項目に2011年と2019年の年度による有意差はなかった。

3) 国リハコレクションの効果：「(国リハコレクションで) 着てみたい衣料の有無」「(国リハコレクションが) 参考になったか」の2項目について分析を行った。 $\chi^2$ 検定と残差分析の結果、「着てみたい衣料の有無」について障害のない群では、障害のある群と比べ、「有」の回答が有意に多かった ( $p=0.019$ ) (図2)。次に、2項検定の結果、障害者では、「着てみたい衣料の有無」について、「有」の回答が有意に多く ( $p=0.00010$ ) (図3)、「参考になったか」について、「なった」の回答が有意に多かった ( $p=0.00000023$ ) (図4)。なお、 $\chi^2$ 検定の結果、「参考になったか」については、障害の有無で回答に有意差がなかった。次に、 $\chi^2$ 検定の結果、両項目に2011年と2019年の年度による有意差はなかった。

【考察と今後の課題】 障害者の衣料の課題については、9年間経ても、困っていることや、着たい衣料の入手に課題がある人が一定割合いることが明らかになった。そのため、課題解決のための研究、実践が必要である。また、国リハコレクションの効果については、着たい衣料を開発できており、また参加者の参考となっていることが確認できた。今後は、障害者の衣料と社会参加等へのリハビリテーションへの効果を実証的に明らかにすることが期待される。

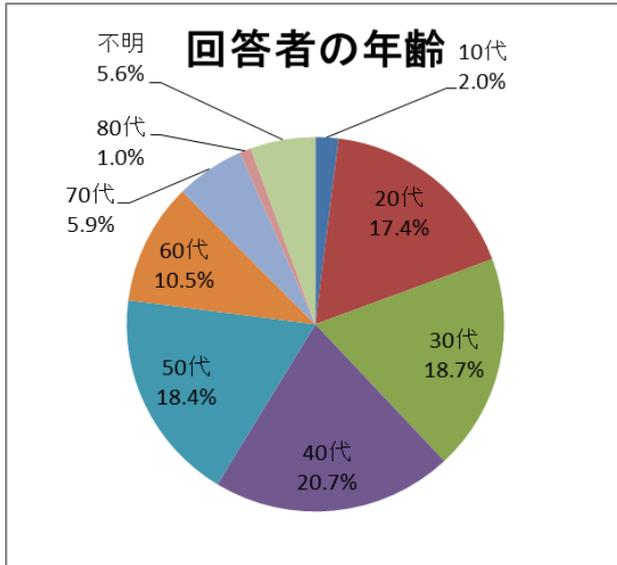


図1 基礎統計  
(回答者の年齢)

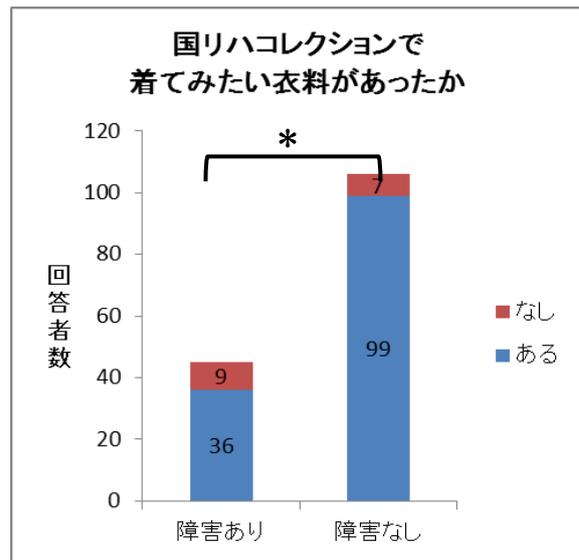


図2 障害の有無による違い  
(着てみたい衣料の有無)

\* :  $p < 0.05$  ( $\chi^2$ 検定)

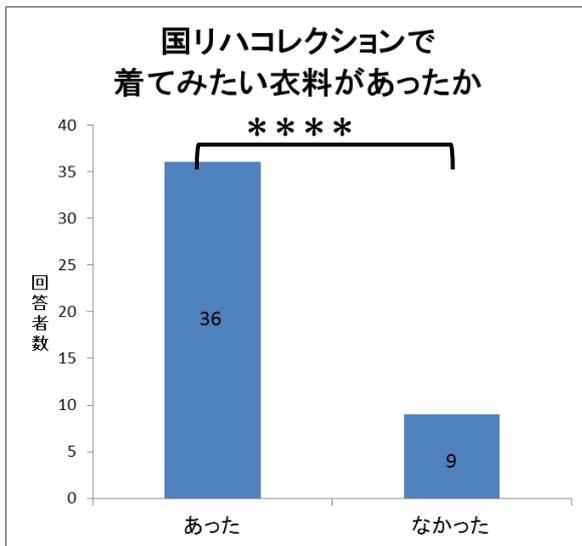


図3 障害者で多かった回答  
(着てみたい衣料の有無)

\*\*\*\* :  $p < 0.001$  (2項検定)

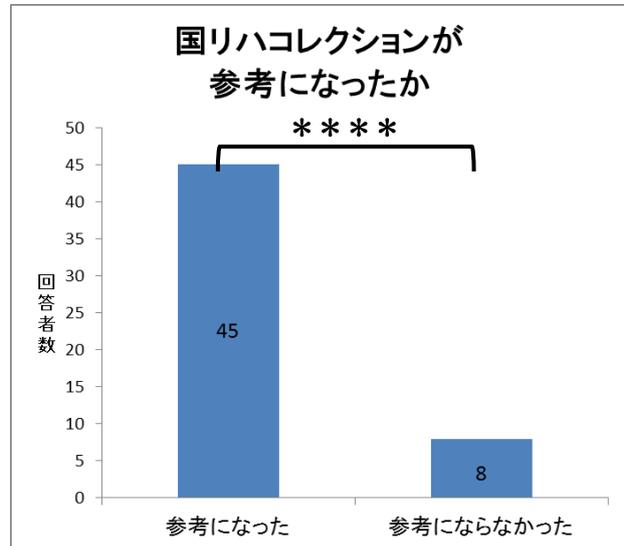


図4 障害者で多かった回答  
(参考になったか)

\*\*\*\* :  $p < 0.001$  (2項検定)